

東アジア レビュー

2023年4月号

[HTTP://EARI.JP/](http://EARI.JP/)

- 【視点】 日韓関係正常化への道は未だ遠し
—東京での首脳会談の評価— 姜英之 …1
- 【南の窓】 31年ぶりに崩れる2航空会社体制 編集部…3
- 【北の窓】 「文明国建設」のスローガンに反して文化閉鎖国家に…4
- 【紀行】 東アジアへの思いいざなう対馬の旅 小野田明広…5
- 【研究ノート】 マルクス唯物論批判試論
第3回 神の処刑—「ヘーゲル法哲学批判序説」検証— 姜龍一 …8
- 【案内】 東アジア国際シンポジウム …11
- 【編集後記】 RYU …12

【視点】

日韓関係正常化への道は未だ遠し —東京での首脳会議の評価—

姜英之

表面的な友好ムードを打ち消す韓国世論

韓国の尹錫悦大統領が3月16日訪日し、岸田首相と首脳会談を行った。「戦後最悪」とまで言われるほど悪化している日韓関係の改善へ向けての5年ぶりの両国首脳会談であっただけに、日韓両国民のみならず、世界のマスコミも注目した。

会談では、日韓間の懸念問題であった徴用工訴訟問題をめぐり、尹大統領が「第3者弁済」方式の解決策を提示、岸田首相が支持を表明した。また、懸案の歴史認識については、過去の植民地支配への痛切な反省と心からのお詫びを明記した1998年の日韓パートナーシップ宣言を含む歴代内閣の立場を継承しているとの考えを日本側が示した。

10年以上も途絶えたシャトル外交の再開、外務、防衛当局による「日韓安全保障対話」の再開、日韓経済安保の枠組み強化、半導体材料3品目の対韓輸出規制の緩和などで合意し、会談後は、夜に銀座のすき焼き店で会食。その後は近くの洋食店で異例の2次会を開き、首脳間の親睦を深めるなど、表面的には、友好ムードの中で会談が行われ、成功の雰囲気醸成した。

日本のマスコミは、「悪化した日韓関係正常化への土台を築いた」という肯定的評価をしながらも、徴用工訴訟問題について、いつまたゴールポストを動かされ、手の平を返されるかもわからないという憂慮の念を示した。それもそのはず、韓国の世論調査では、60～70%が日韓首脳会談の成果に否定的評価を見せたからである。

保守系大手紙、東亜日報の社説（同日付）は「解決策」に対して「誠意ある措置を期待したが、日本の態度には失望させられる。歴史問題は解決されていない」と断じた。

革新系のハンギョレ新聞は「謝罪責任から逃れた日本の外交的な圧勝」と論じた。

予想された自国内の反対世論にもかかわらず、大胆な「政治的決断」をもって韓日関係改善に臨んだ尹大統領の底意は何か？ 尹大統領は帰国後の3月21日、閣議において「韓日は、ウインウインの関係になりうるし、必ずそうなるべきだ」とし「我々の社会には排他的な民族主義を叫び、政治的な利益を得ようとする勢力がいる」と述べた。今回の韓日首脳会談に対し、「屈辱外交」「日本の手下になった」と酷評した野党「共に民主党」の李在明代表を念頭に置いた発言であった。いわゆる「反日種族主義」（李栄薫ソウル大教授の著作）が韓国社会に批判無しに広がっている状況を問題視し、未来世代中心の韓日関係を構築することへの強い信念を披露した発言だった。この信念の持続性については日本の保守層に相当の危惧感がある。産経新聞のソウル支局長はコラムで「尹錫悦大統領がこの『脱反日』姿勢をどこまで貫いていけるか注視していく必要がある」と指摘している。

尹大統領は、訪日する前の3月1日、1919年に起きた「3・1独立運動記念式典」で演説、日本について「過去の軍国主義の侵略者から、我々と普遍的価値を共有し安全保障や経済、グローバルな課題で協力するパートナーとなった」と強調した。日本に謝罪や反省を求める言及や、徴用工問題に関する発言はなかった。

過去、反日感情を鼓吹する場になりがちだった「3・1式典」で、過去の歴史問題にこだわらず、未来志向の韓日関係構築へ向かおうとする、ある意味では画期的な決意表明であった。

この政治的決断を促したのは、朝鮮半島をめぐる地政学的国際情勢の変化である。北朝鮮の核・ミサイル脅威がさらに大きくなり、ロシアのウクライナ侵攻、米中対決下の中国の台湾進攻につながる懸念を高める動き、この中で、日米韓の3か国の安保枠組みはあっても、日韓安保の枠組みは弱く不安定であり、依然として“弱い環”となっていた。米朝間の軍事的衝突の危険が差し迫っている状況の中で、米国にとっては、これ以上の日韓外交政治関係の悪化は好ましくない。また自国の安保不安の解消は、日韓双方とも共通の課題であり、米国の同盟国としては、米国の意向を受け入れざるを得ないのも現実だ。

1965年の日韓条約締結時、両国において100万規模の反対デモが起きて難航を極めた。だが、60年代のベトナム戦争激化に苦しむ米国は、支援が当てにできる日韓双方に圧力を加え締結を急がせた歴史的経緯がある。今回の日韓首脳会談も、政治的妥結を急がせた要因と背景は安保が最大の変数であったことは、歴史の反復を強く思いいたらせるものだ。

だが、日本のマスコミの多くが、手の平返しの変化を懸念している通り、韓国世論は、相当厳しい。

今日の日本の民主主義を評価し、これ以上謝罪を求めず、ウインウイン関係を築くという姿勢は、総論として評価できるが、そのためには、日韓両国政府が、韓国国民の心の底にある意識をもう少し丁寧にくみ取り、各論的に具体的な措置を講じていかない限り、不安定化は免れないだろう。

日韓正常化への道は未だ遠し、の感あり。



31年ぶりに崩れる2航空会社体制

編集部

韓国の格安航空会社(LCC)「エアプサン」は3月16日、第二の都市・釜山と日本の九州・宮崎を結ぶ路線を23日から不定期便として運航すると発表した。既に同社は、関西空港と釜山（金海国際空港）を結ぶ定期便を2月1日から、毎日2便から3便に増便していた。コロナ禍がやっと峠を越え、日韓関係改善を追い風として、日本各地からの観光客誘致に本格的に乗り出す構えのようだ。

エアプサンの親会社は韓国第二の航空会社アジアナ。ところがアジアナ航空は2019年以來の経営悪化で、大韓航空(コリアンエア)に買収されることが決まっており、その吸収手続きが進行中だ。

海外旅行自由化の方針に合わせて1988年12月、韓国政府は大韓航空が独占してきた航空業界の国内線にアジアナ航空を初就航させた。以来続いてきた韓国の2航空会社体制は、間もなく崩れることになる。

歴史的な地域対立に風穴と期待

1988年のソウル・オリンピック大会は韓国の政治、経済にとり大きな転機だった。

韓国は、南北朝鮮の排他的な外交対立パターンを「クロス承認」で多角化し、経済水準で北朝鮮を引き離した。中進国に至った自信が、国内政治で光州事件の傷による民心離散を大統領直接選挙につながる「民主化」で食い止め、結果的に金大中政権の誕生へとつながった。

朴正熙長期政権時代には、自身の出身地である韓国南東部、慶尚道への肩入れが目立った。

逆に南西部、全羅道（湖南地方とも呼ばれる）では金大中氏ら野党勢力が9割近い票を集め、地域対立の解消が叫ばれた。

湖南地方の数少ない財閥グループで、高速バス運行の錦湖高速を主体に、石油化学、タイヤ、建設へ手を広げた錦湖グループが、アジアナ航空として新参入した背景には、この地域対立に風穴を開ける狙いもあった。

アジア通貨危機で倒れた大宇建設を買収したことで錦湖グループの資金繰りが悪化。アジアナ航空株の大手株主である錦湖産業が2019年、建設業を主体とするHDC現代産業開発との間で、アジアナ株の売却話をまとめ上げた。ところが2019年以來の日韓関係悪化で日本便の利用客が大幅に減ったうえ、コロナ禍で中国、東南アジア路線も苦境に陥って売却話は白紙化。政府系の産業銀行が資金を注ぎ込んで、首位の大韓航空によるアジアナ吸収合併がまとまった。

大韓航空の持株会社である韓進グループは2020年11月の取締役会で買収を正式に決め、現在は米国、EU、日本との間で相互乗り入れ便数などの調整交渉が進んでいる段階だ。



大韓航空（手前青色）がアジアナ（奥灰）を吸収合併へ

韓流ブームに手を焼く当局

朝鮮労働党機関紙の労働新聞は3月26日付で「全社会に高尚な道徳的氣風を確立するうえで、人々が服装を高尚にし、礼節を守ることが重要である」との論評記事を掲載した。

激しく展開されている米韓合同軍事演習に対抗し戦時体制を取っている緊張した社会的雰囲気の中で、服装文化について論評したのは、社会主義思想・文化を保護し、社会の氣風の弛緩を防ぐキャンペーンであろう。同時にそれは、北朝鮮社会で蔓延しているとされる韓流ブームの浸透が、社会主義体制そのものへの無視できぬ否定的要素として拡大していることの表れでもあるとみられる。

労働新聞は、「服装には人々の思想精神的風貌と人格が反映し、それを通じて国と民族の精神状態と文明水準を推し量れる」とし、「健全な思想意識と高い文化的素養、高尚な道徳品性を持った人は、服装がいつも美しく高尚である」と強調した。そして「すべての社会成員は、優秀な文化伝統を持っている民族的誇り、社会主義文明建設を力強く推し進める自負心をもって、服装礼節をよく守っていくことに深い関心を寄せなければならない」と諭した。

これほど正しい服装文化を強調しているのは、近年になって外部からの文化流入、特に韓国のドラマ、映画などの流が込んできたのを受けて、韓国風の服装や言葉使いをマネする住民、特に若者が増えている現象に対して、国際制裁の中、国内団結の弱体化につながる恐れがあると、当局が判断してのことと思われる。

北朝鮮の駐英公使を務め、韓国に亡命した太永浩議員（韓国与党「国民の力」所属）によれば、平壤市内では若者がジーパン姿で、男女で手をつないで楽しんでいる風景は少なくないそうで、朝の挨拶も朝鮮・韓国語の「よく眠りましたか」ではなく、グッド・モーニングを直訳した「よい朝ですね」と言うそうである。

中国経由の韓国製CDでドラマや映画が秘密裏に観賞され、当局に摘発されるケースはが頻発しているという。

超厳罰での取り締まりが奏功するか疑問

北朝鮮が韓国との経済競争に敗れ社会主義の優越性に疑問が持たれる状況の中で、資本主義文化・思想の浸透は、社会の風紀を乱し、反政府思想の温床ともなりかねないから、金正恩政権にとって抜き差しならぬ重大な出来事に映っているのだろう。

早速その対策として、2020年には人民の外部情報への接近を完全封鎖するため「反動思想文化排撃法」を制定。韓国のドラマ、映画など映像物を流布した者、視聴する者に最高で死刑までの厳罰を科す、という悪法だ。韓流を止めることができないほど、北朝鮮社会は変化しており、特に若者たちの動向は、手に負えなくなっている状況が推察できる。

それでも若者の間で、韓流ドラマなどの影響で韓国の標準語であるソウル言葉がはやるようになると、2023年1月、最高人民会議第14期第8回会議で「平壤文化語保護法」を採択し、ソウル言葉や外国語風の言い回しに対し、強力な取り締まりを始めた。こうした取り締まりが通用するか、反発を呼び起こすか、予断を許さない状況である。

北朝鮮では、地方の一部で、餓死者が出ているという情報もあり、食糧問題で当局は、手を焼いている。北の人民は、飯も十分に食べたいが、外国世界の情報、文化にも飢えている。

「社会主義文明国建設」と聞こえの良いスローガンとは裏腹に、国民の知る権利、外国文化を享受したいという気持ちを抑える極端な文化閉鎖政策は、改革・開放の時代に向かう動きへの逆行の道でしかない。。勇壮なスローガン通り進むかは疑問だ。文化閉鎖国家になってほしくない。

東アジアへの思いいざなう対馬の旅

小野田明広（共同通信 元編集委員）

昔から訪ねたかった対馬に昨秋行って来た。飛鳥時代に大和朝廷が百濟救済のために今の韓国南西部にある白村江で戦って敗れ日本に撤兵後、唐・新羅軍の逆襲を恐れ、防人を配備して守りを固めた地だ。

また、モンゴルに発し中国を支配した元が、鎌倉時代に高麗軍を伴って襲来、2回も支配下に置かれた島でもある（元寇）。

同時に江戸時代は朝鮮通信使が徳川将軍を友好訪問する際の玄関口の役割を果たした。

島の各所に、東アジアと日本とのつながりを思わせる遺跡や文化が残っている。

宗家の墓所に過ぎし日を偲ぶ

長崎、福岡から「対馬やまねこ空港」に飛ぶ手もあるが、博多港からの海路を使った。

快速ジェットfoilで途中、壱岐に立ち寄り2時間ちょっと。平野が多い壱岐と対照的に、対馬はリアス式海岸が入り組んだ崖上に山々が連なっている。

島は上下に二分され、厳原(いずはら)が下島の主要港。上島には比田勝(ひたかつ)というやや小ぶりの港があって、釜山からジェットfoil1時間10分で来ることができるので、韓国の若者が夏のレジャーシーズンによく利用している。

厳原港からゆるい上り坂の目抜き通りが続き、幅も広くて見通しが開ける。左折すると端正な櫓門が見える。豊臣秀吉の朝鮮出兵時に築かれた山城・清水山城の下にある金石城(かねいしじょう)の大手門櫓で、天守が無い代わりに櫓門が建てられた。

1990年の復元建築だが、「日本の玄関口に過ぎない島なのに、こんな立派な城門があるのか」と朝鮮通信使の目を驚かせる効果を狙っていたのだろう。府中とも呼ばれた厳原の街中に何カ所も、特産の頁岩で下部を固めた白壁塗りの高い塀が続いている。これも同じ狙いだらう。



櫓門をくぐってさらに登ると、間もなく対馬藩主・宗家の墓所である万松院(ばんしょういん)に着く。両脇に石灯籠の立つ長い階段(百雁木)の途中に側室との間の子どもの墓、上には当主と正妻の墓が並んでいる。20代当主の義成(よしなり)が17世紀初めに菩提寺として建てた、比較的新しい墓所だ。なので、「文永の役」の元寇襲来時に、厳原から西に峠越えて70騎たらずの武士の先頭に立ち、数十倍の敵と戦って討ち死に全滅した宗助国は含まれていない(仲間の武士の手で「首塚」「胴塚」など、ばらばらに葬られたとの伝説がある)。



万松院の本堂には、朝鮮通信使から寄贈されたという仏具「三具足」(花立,香台,燭台)が飾られている。



帰路の下り坂に「李王家宗伯爵 御成婚奉祝記念碑」が立っているの見える。

李氏朝鮮26代の王・高宗が側室との間にもうけた徳恵翁主(オンジュ)と、実父・黒田和志の縁で伯爵になっていた宗家37代の宗武志との結婚の祝賀碑。徳恵は12歳で京城(現ソウル)から離れ東京の学習院に学び、童謡の作詞に優れていたが心の病を得て1955年に離婚した。

日韓併合時代のエピソードのひとつだ。



近代の戦争遺跡も

対馬には幕末から昭和にかけて31カ所の砲台が作られ今も戦争遺跡として残る。厳原の観光案内施設の地図で戦略地点だと確認できる。(上の円形図は朝鮮通信使の行進)



大半がロシア関係だ。幕末の1861年にロシア軍艦ポサドニック号が島のくびれ部分、浅茅湾(あそうわん)南西側にある芋崎半島に上陸、宿舎を建てたり井戸を掘ったりして日本に租借を求めた事件がきっかけだった。イギリスに助力を求め外交的解決にこぎつけたが、日露戦争の遠因といえる。

旧日本海軍はロシアの水雷艇対策として浅茅湾から対馬東側に抜ける水路として万関瀬戸を掘削、この上に万関橋を架けた。これが今でも上島と下島を結ぶ唯一の陸路となっている。この輸送の不便さのため、上島の商店での物価は下島より高いようだ。



一方、日本海海戦で撃沈されたロシア艦から逃げた将兵を上陸後に対馬島民が面倒を見た記念碑が、東郷平八郎連合艦隊司令長官の題字で島東部の三宇田浜高台に残っている。三宇田浜はリアス式海岸の続く対馬では稀有のきれいな砂浜海水浴場だ。

第2次大戦へと軍備拡張一辺倒だったように思える日本だが、満州進出問題で国際連盟から脱退する前までは、国際関係に気がつかない軍縮に協力した実績もある。

対馬の最北端、鰐崎にある豊(とよ)砲台がそれを物語る。第一次大戦後、主要国が戦闘艦の建造を競い合っただけで国力が疲弊、1921年から22年にかけてワシントンの軍縮協議で海軍軍縮条約が結ばれた。その結果、軍艦搭載の余剰艦砲が陸に移設された。



今では巨大な落とし穴のような豊砲台跡だが、40.6cm加農(カノン)砲一基2門が「赤城」とも別の艦ともいわれる軍艦から外され、対馬に持ち込まれた。

現在でも対馬の戦略上の重要性に変わりはない。豊砲台のすぐ西には「韓国展望台」があるが、この観光名所のすぐ下には航空自衛隊のレーダー基地がある。

厳原港の近くには陸上自衛隊、西海岸には海上自衛隊の部隊がそれぞれ駐屯している。

東アジアに近かった古代日本

再びくびれ部、浅茅湾に立ち戻ろう。海中に2基の鳥居が立ち、本殿までの地上部3基の鳥居に続く和多都美神社(わたつみじんじや)。亀の甲羅を焼いてひび割れで吉凶を占う亀卜(きぼく)を行う場所の亀甲石、石や古木を神体とみなす磐座(いわくら)など、古代の神話の世界が東アジアへとつながっている。

白村江の戦い後の667年、浅茅湾南岸に突き出した城山(じょうやま)に金田城(かなたのき)が築かれ、東国から召集された防人たちが朝鮮半島を睨み続けた。



金田城「二の城戸」(にのきど)の堡塁

そして1274年の「文永の役」。テレビアニメ「アンゴルモア元寇合戦記」(たかぎ七彦作、のちにゲーム「Ghost of Tsushima」に)で奮戦した老将・宗助国の絵看板と、平和の鳩が付いた「元寇七百年記念平和之碑」が上陸現場の小茂田浜には置かれている。

推薦：日韓両国語が使える厳原の宿「対馬STORY・SORA」
<https://www.tsushima-net.org/stay/tsushima-story-sora>

【研究ノート】 マルクス唯物論批判試論

第3回 神の処刑

—「ヘーゲル法哲学批判序説」検証—

姜龍一（作家）

少なくとも、マルクスの生きた時代に於いて、ユダヤ人という民族は、《神》の名の許に疎外を受けた一呪いの民族—だったのであった。そういうことを前回見てきた。そして、そうだとすれば、それを痛感せざるを得ない、宗教的、歴史的、そして社会的背景を背負い、生きていかねばならないという、そんな呪いの烙印が、ユダヤ人という民族の宿命であったとしたならば、そこから自己を解放し、魂の安息を得んがためには、《神》を殺す外に道はない。ユダヤ人であるマルクスが、自己の思想形成への道を、そこから出発したとして、何の不思議があるであろうか。またそれを、一体誰が、とがめることが出来るのか。天国の門は閉ざされていた……永遠に。《神》の名によって閉ざされていた！

……だがしかし、仮に《神》という物が人間の、未開蒙昧なる旧時代人の、自意識の反映に過ぎないとしたら？ 人間性の回復は、血による疎外からの解放は、宗教の否定、《神》の処刑によってしかあり得ない！ 若き日のマルクスは、そういう風に考えていたのではないかと思う。

それでは、私のこの説の論拠となるべき、マルクス自身の発言を、前回の最後にご紹介した彼の処女論文「ヘーゲル法哲学批判序説」から拾っていこう。当時、マルクスは26歳。ヘーゲルを研究する学徒であった。ちなみに、当時の欧州にあって、哲学界の最高権威として君臨していたヘーゲルのものした「法哲学」自体を簡略に要約すると、《神を中心として、自己の主観と客観を統一した正義の顕現たる道徳的自我が、善なる客観的一般性（社会）と主客統一することにより、共同体の倫理が実現される。それが社会・国家の法であり、また、それが法であらねばならぬ。つまり、国家の法とは、神を中心とした正義の実現なのである》といった内容である。

（あくまでも、私個人の解釈である。世界一難解と言われるヘーゲル哲学は、それ故に、当時より今に至るまで数多くの解釈が存在し、定説を打ち立てることは出来ないが、少なくとも私はヘーゲルを、そういう風に読み取った。ご参考までに受け取って頂ければ幸いである）つまり、ヘーゲルはどこまでも、人間の心の主体は神であり、人間の主体は体ではなく心であって、それ故に世界全体も、神を中心とした人間の心の延長であると規定している。そしてそれは、キリスト教を中心とした当時の西洋世界における常識ともいべき世界観であった。

それでは青年マルクスは、そんな常識を打ち破るべく、どのような思想を展開し、キリスト教世界へのアンチテーゼとして、如何なる世界観を構築せんとしたのであるか。まさしくそれが、今回の主題なのである。以下、本文を引用する。

天国という空想的現実のなかに超人を探し求めて、ただ自分自身の反映だけしか見いださなかった人間は、自分の真の現実性を探求する場合に、ただ自分自身の仮像だけを、ただ非人間だけを見いだそうなどという気にはもはやなれないであろう。

反宗教的批判の基礎は、人間が宗教をつくるのであり、宗教が人間をつくるのではない、ということにある。しかも宗教は、自分自身をまだ自分のものとしていない人間か、または一度は自分のものとしてもまた喪失してしまった人間か、いずれかの人間の自己意識であり自己感情なのである。しかし人間というものは、この世界の外部にうずくまっている抽象的な存在ではない。人間とはすなわち人間の世界であり、国家であり、社会的結合である。この国家、この社会的結合が倒錯した世界であるがゆえに、倒錯した世界意識である宗教を生み出すのである。

（中略）

宗教は、人間の本質が真の現実性をもたないがために、人間の本質を空想的に実現したものである。それゆえ、宗教に対する闘争は、間接的には、宗教という精神的芳香をただよわせているこの世界に対する闘争なのである。

宗教上の悲惨は、現実的な悲惨の表現でもあるし、現実的な悲惨にたいする抗議でもある。宗教は、抑圧された生きものの嘆息であり、非情な世界の心情であるとともに、精神を失った状態の精神である。それは民衆の阿片である。民衆の幻想的な幸福である宗教を揚棄することは、民衆の現実的な幸福を要求することである。

（「ヘーゲル法哲学批判序説」71～72ページ 城塚登記 岩波書店）

—宗教は民衆の阿片である—

この言葉をもってマルクスは、19世紀の西洋世界を支配するキリスト教への、そして《神》への、宣戦布告を高らかに宣言したのであった！ 抑圧され、悲惨にあえぐ人間を、空想上裡の倒錯された創造物たる《神》という名の呪縛から、現実的な幸福の道へ、真に解放してやらんが為に。そして自身を、《神》の名の許での血による疎外から、自由へと解き放ってやらんが為に。

そして、この論文の結論としてマルクスは、キリスト教的世界からの「ドイツ解放」のための、具体的方法について述べている。このときの、マルクスの、弱冠26歳にしてのこの結論は、彼の終生変わらなかった、マルクス主義の根幹であり、後に「共産党宣言」、そして「資本論」へと発展してゆく核なのである。再度、マルクスの言葉を引用する。



では、どこにドイツ解放の積極的な可能性はあるのか？

答え。それはラディカルな鎖につながれた一階級の形成のうちにある。市民社会のいかなる階級でもないような市民社会の一階級、あらゆる身分の解消であるような一身分、その普遍的な苦難のゆえに普遍的な性格をもち、なにか特別な不正ではなく不正そのものを蒙っているがゆえにいかなる特別の権利をも要求しない一領域、もはや歴史的な権原ではなく、ただなお人間的な権原だけを拠点にすることができる一領域、ドイツの国家制度の諸帰結に一面的に対立するのではなく、その諸前提に全面的に対立する一領域、そして結局のところ、社会の他のすべての領域から自分を解放し、それを通じて社会の他のすべての領域を解放することなしには、自分を解放することができない一領域、一言でいえば、人間の完全な喪失であり、それゆえにただ人間の完全な再獲得によってのみ自分自身を獲得することができる一領域、このような一階級、一身分、一領域の形成のうちにあるのだ。社会のこうした解消が一つの特異な身分として存在しているもの、それがプロレタリアートなのである。

（中略）

結論を要約しよう。

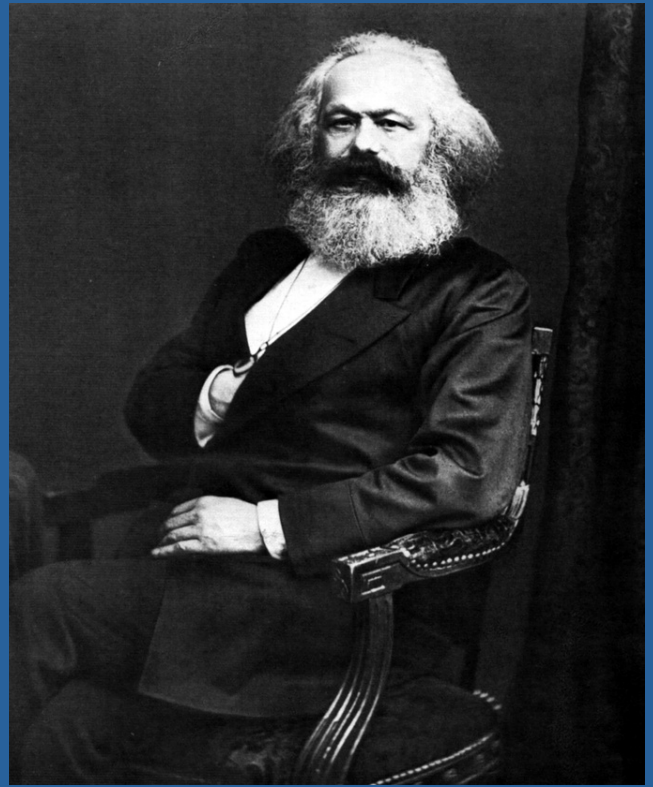
ドイツのただ一つ実践的に可能な解放は、人間を人間の最高のあり方であると宣言するところの、この理論の立場からする解放である。ドイツでは、中世からの解放は、同時に中世の部分的克服からの解放としてのみ可能である。ドイツでは、あらゆる種類の隷属状態を打破することなしには、いかなる種類の隷属状態も打破することができない。根本的なドイツは、根本から革命を起こさなければ、革命を起こすことができない。ドイツ人の解放は、人間の解放である。この解放の頭脳は、哲学であり、その心臓はプロレタリアートである。哲学はプロレタリアートの揚棄なしには実現しえず、プロレタリアートは哲学の実現なしには自己を揚棄しえない。

（同上 94～96ページ）

以上である。原文を長々と引用したが、マルクス主義に馴染みの薄い方にとっては、解りづらい文章であったかと思う。読者の理解を整理するため、マルクスのこの論文の結論を簡単に要約すると、《人間（この論文では主にドイツ人）が抑圧と不正にあえぐ真の原因は、宗教——キリスト教が支配する社会・国家制度の存在そのもののうちであり、その奴隷状態から、真に人間を解放するには、抑圧と不正の根本原因であるキリスト教を——神を廃棄し、キリスト教的社会を根本から革命的に変えねばならぬ。そして、そのためには、革命的な真の哲学（つまりマルクス主義）を中心として労働者階級—プロレタリアートが団結し、支配階級（ブルジョアジー。その本質はキリスト教）を打倒するための革命を起こさなければならない》ということである。

もっとも、それだけ聴いても、果たしてそれが、良いのか悪いのかよく解らない。現代の日本に於いて、はじめてマルクスに接した方の大半が、そのような印象を抱くのではないかと私は思う。それが、率直な感想であろうかと思う。そして、その是非を判断するにはその前提として、マルクスの言うところの《真の「哲学」》というものが、一体どんなものであるのかを、正しく理解する必要がある。そう考えるのが自然であろう。そこで今回は、マルクスの言うその「哲学」について——マルクス主義というものについて——、その本質を、探っていきたいと思うのである。

<続く>



カール・マルクス（1818~1883）

プロイセン王国時代のドイツの哲学者、経済学者、革命家。社会主義および労働運動に強い影響を与えた。1845年にプロイセン国籍を離脱しており、以降は無国籍者であった。1849年（31歳）の渡英以降はイギリスを拠点として活動した。

フリードリヒ・エンゲルスの協力のもと、包括的な世界観および革命思想として科学的社会主義（マルクス主義）を打ち立て、資本主義の高度な発展により社会主義・共産主義社会が到来する必然性を説いた。ライフワークとしていた資本主義社会の研究は『資本論』に結実し、その理論に依拠した経済学体系はマルクス経済学と呼ばれ、20世紀以降の国際政治や思想に多大な影響を与えた。

（ウィキペディアより）

※9ページの挿絵はArmut im Vormärz（1840/Theodor Hosemann画/Wikimedia commons）©Public Domainより。

【案内】

テーマ 日韓関係改善のための 新しい接近方法

—悠久な歴史の中から、和解友好の鍵を探す—

日韓両国が戦後最悪の関係にあるとされていますが、韓国の尹錫悦政権の登場で変化がみられます。尹大統領と岸田首相の首脳会談も10年ぶりに実現し、外交的関係改善の兆しがみられます。また再びの韓流ブームの波に乗って、コロナ禍沈静化に伴う入国規制の緩和に伴い、両国若者の相互旅行者の数が急増しており、両国間の国民の好感度が増しており、相互理解が進んでいます。しかし、慰安婦問題、徴用工問題など近・現代史をめぐる懸案があり、いまだ、ギクシャクした関係が残っています。緊張する東アジア情勢の中において日韓の和解・友好親善関係こそ東アジアの安定と平和、繁栄、両国の発展に必須であります。

本シンポジウムの目的は、過去に縛られず未来志向の日韓関係構築の意味と当為性を、5000年の日本と朝鮮半島の悠久の歴史を紐解きながら、両国関係改善の鍵を探すことにあります。韓国の古代史専門の大家、李徳一先生と中世の朝鮮精神思想史専門の大家、小倉紀蔵先生の基調講演を中心に両国民の相互理解と未来友好に資する討論を進めます。各位におかれましては、調査研究、言論報道、政策樹立、さらには、将来のビジネスチャンスを探るうえで貴重な場となることと思ひ、ご案内申し上げます。

記

日時 2023年5月17日（水）12時受付、13時開始、18時懇親食卓会（会費5000円）

会場 東京・学士会館210号室（地下鉄神保町駅A9番出口前）

主催 東アジア総合研究所 韓国ハンガラム歴史文化研究院

後援 駐日韓国大使館 日本外務省 日韓・韓日親善協会中央会（以上、予定）

参加費 3000円（資料代を含む）

※コロナ禍のため先着50名様に限らせていただきます。

申し込み方法 下記の事項を記入してFAX03-6231-2862または当研究所のe-mail eari_kang07@yahoo.co.jpにてお送りください。

2023東アジア国際シンポジウム参加申し込み

氏名
所属
住所
電話番号
FAX番号
Email 住所



【編集後記】

ご覧になった方もあるかも知れぬが、たまに行くカレー屋のオヤジに勧められ、「赤い闇—スターリンの冷たい大地で—」という映画を観た。

タイトルどおり、スターリン時代の恐怖政治、特に「五カ年計画」の美名の許（もと）でのウクライナにおける人為的大量餓死の糾弾が主題の映画であった。劇中でのスターリン時代のソ連の描写が、僕自身、何人かの脱北者から直接聴いた北朝鮮での現実と、そっくりだったのが印象的である。

昔も今も、共産主義者の、レーニン以来のお家芸である浸透工作によって、西側諸国の社会各層に浸透している「容共派」といわれる連中によって、真実は歪められ、自由主義陣営へと伝えられている。それもやはり、洋の東西を問わぬものなのかも知れない。そんなことを再確認させられる映画であった。

製作は2019年。英国と、ポーランド、そしてウクライナの合作である。

今日まで続くウクライナ侵略戦争開戦の、約三年前に作られた作品。ウクライナ人の手によって、この映画が作られたという事実からも、スターリン時代への懐古・再評価の進むロシアと、ウクライナにおける「ソ連」に対する感情の、大いなる差異が、はっきりと読み取れるであろうと思う。

数百万のウクライナ人の生き血を啜り大国化したスターリンのソ連と、同じく数多のウクライナ人の屍（かばね）の上にソ連復活の夢を見るプーチンのロシア。やはり古くからいわれるように、「歴史は繰り返す」ものなのか。

そうであるなら冷戦の終焉、ソ連帝国の崩壊も、早く繰り返してほしいものである。当時のソ連、そして現代の北朝鮮の、実情を知るにはオススメの映画だ。（RYU）

東アジアレビュー 2023年4月号

第33巻・第3号 通巻 194号

2023年4月1日 発行

発行人 姜英之

編集人 小野田明広

発行所 一般財団法人 東アジア総合研究所

TEL 03-6231-2361

FAX 03-6231-2862